

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌
【かざぐるま】

2012 春号

58

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 根来寺遺跡の発掘調査

連載

文化財建造物課短信
和歌山文化財百景
きのくに歴史小話
「建築彫刻の話」
「発掘屋余話」

根来寺遺跡の発掘調査

根来寺遺跡は現在の根来寺を中心として、和泉山脈南麓の北山と南側の前山を含む南北約2km、東西は東の菩提峠から西の住持池付近までの約3kmの範囲に及ぶ中世の一大寺院跡です。

発掘調査は一般国道24号京奈和自動車道の建設工事に伴い、国土交通省の委託を受けて平成23年7月から平成24年3月まで実施しました。調査地は県道泉佐野岩出線と広域農道の交差点北東側の調査区1と、市道桃坂線にまたがる調査区2の2箇所に分かれています。既に市道桃坂線では1984年から1987年にかけて普通農道整備事業に伴う発掘調査を実施しており、数々の遺構・遺物が見つかっています。

調査区1

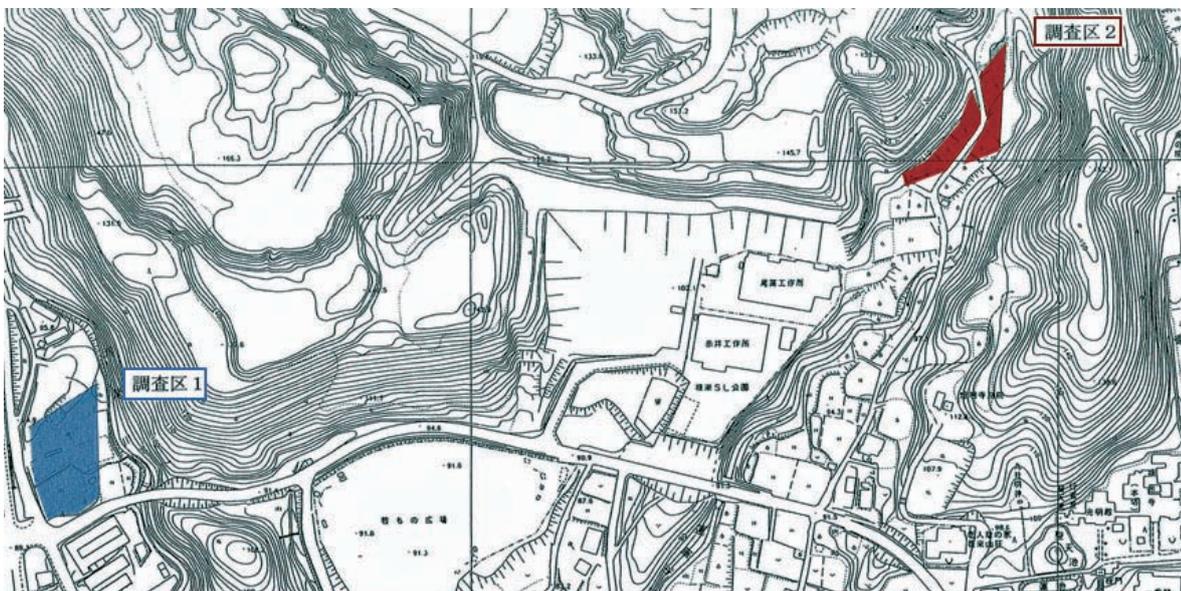
根来寺山内の周辺部には中世の水

田が棚田状に開発されていたことが判りました。これまでには山内の発掘調査が多く、今回の調査で初めて周辺部に農耕生産域のあったことが明らかとなりました。また、古くは縄文時代の土器や石鏃が出土しており、近辺に縄文遺跡の存在が想定できるようになりました。

調査区2

西の山裾側から東の蓮華谷川の川岸にかけて、中世根来寺子院の敷地跡10段以上や、敷地の区画に伴う石垣・暗渠・石組溝、そして敷地群の間には南北方向の古道、その古道に沿って築かれた石垣、古道を横断した瓦質土管の排水路、また敷地内には石組井戸、地下式倉庫の階段部分、埋甕遺構、地鎮遺構など、多種多様な遺構を検出しました。

石垣は4箇所検出しており、敷



調査区位置図

地区画の2箇所と古道沿いの2箇所に分けられます。規模は長さ11.2～16.6m、高さ0.2～1.0mと様々です。石材は主に和泉砂岩の角礫で、10～20cm大の小振りの石から120cm大の大石がみられます。積上げ段数は後世に壊されて基礎石列の1段だけが残されたものから、小振りの石を6段以上積んだものまでありました。

暗渠は3箇所で検出しました。規模は長さ13.7～17.2mで、側石の上には蓋石を横置きに渡して整然と敷き並び、敷地区画の縁辺部に整備されました。

石組溝は10箇所で検出しています。中でも注目されたのが内幅70～80cmの石組溝(329)で、埋土には鬼瓦・軒瓦などの瓦類や、五輪塔・宝篋印塔・板碑などの石造物が大量に詰め込まれており、石造物には「享祿四年」(1531)銘を刻むものや、金文字・金装飾を施すものがありました。

古道は延長80m程が確認できました。道幅は瓦質土管の排水路が横断し

ている場所では約2mありました。この古道の一部は近世以降から現代に至るまで農耕用の作業路として活用されてきたようです。

瓦質土管の排水路は長さ12.8mを

検出しました。瓦質土管の寸法は長さ30cm、直径13cmで、これを46個体以上つなぎ合わせて地中に埋設しており、古道があった場所を横断して直近の蓮華谷川に流れ注いでいたようです。



調査区2(2-2S区)全景(北東から)



調査区2 237 地鎮遺構 (南東から)

石組井戸は4箇所で見出しました。規模は内径0.8～1.1mで、深さ1.7mまで確認しました。いずれも和泉砂岩の角礫を積上げて構築していました。

地下式倉庫の階段部分は4段の踏面を検出しました。規模は幅0.9～1.1m、深さ1.2m、階段の勾配は約42度でした。この遺構は風化が進行した岩盤質

の堅い地盤を掘り込んで造られていました。階段を降った先には埋甕を伴う半地下式倉庫の本体部分があるはずですが、そこは調査区外で調査が及びませんでした。

埋甕遺構(370・371)は地中に埋め込まれた備前の大甕^{おおがめ}2基が並んだ状態で検出されました。

上部が壊れていますが、底部付近の深さ30～40cmが残っており、甕は底径40cm程ありました。

地鎮遺構(237)は合わせ口状にして重ねた状態の土師器^{はじき}皿4組を集めて土坑内に埋納した遺構です。根来寺遺跡では同様の遺構が既に3例程検出されており、合わせ口の皿の中に銭貨を納める事例も知られています。

出土遺物は、土師器(皿)、陶磁器類(甕・壺・鉢)、漆器、金属製品(五徳^{ごくとく}・鉄砲玉)、瓦類(軒瓦・鬼瓦)、石造物(五輪塔・宝篋印塔・板碑)など多量に出土しており、様々な遺構と合わせ、当時の根来寺子院の様子が良好に残されていることが判りました。



調査区2 370・371 埋甕遺構 (南西から)

まとめ

これまで市道桃坂線の調査成果から桃坂谷の奥では遺構は少ないとされてきましたが、今回の調査区2の調査では遺構・遺物の残存状態が極めて良好であることが明らかとなり、調査区1の成果も含めて、今後とも中世根来寺遺跡の全体像を解明していく上で大きな成果を得たといえるでしょう。

(長戸 満男)

熊野那智大社災害復旧事業

「守り継ぐということ」

熊野灘を望み、那智大滝を擁する那智山に鎮座する熊野那智大社。その壮大な景観を前にすると、言葉は無用にも思えます。しかし平成23年9月4日未明、台風12号による土石流が甚大な被害を引き起こしました。幹線道路が寸断され、現地で状況を確認できたのは、実に2週間を経過してからでした。徒歩で那智山へと登ると、社殿や瑞垣が泥土にのまれた荒涼たる姿にその言葉を失いました。

重要文化財に指定されている現在の社殿は、江戸時代末期に建てられたものですが、第一殿から第五殿が東を向いて横一列に並び、続いて八間社である第六殿が北向きに建つ独特の配置は『一遍上人絵伝』（鎌倉時代）や『那智山宮曼荼羅』（室町時代）にも描かれ、連綿と受け継がれていることが窺われます。神社の記録を紐解くと、修理や再建を繰り返して社殿が守られてきたこともわかります。その中には熊野三山で同時に実施される

「遷宮」や、「炎上」が度々記されるほか、今回同様の土砂崩れを想起させる「崩」の文字も認められます。

神社には室戸台風により社殿背面の石垣が崩壊した古写真が残ります。平成16年に国庫補助事業として檜皮屋根葺替と塗装の修理を実施した際には、各社殿の小屋組で修理棟札が発見され、昭和9年9月の大暴雨（室戸台風）により建物が大破し、当時の内務省神社局によつて修理が実施されたことが確認できました。当時の修理は足元にコンクリート基礎を設けて金具で建物を引き、第六殿では小屋組をトラスに改造するなど、現在の文化財修理では必ずしも選択しない手法も用いられています。しかし今回社殿が高さ3m近くまで土砂に埋もれたにかかわらず、破損が縁廻りなどの一部に限られ



昭和14年の修理棟札

るなど驚くほど軽微にとどまっています。

前回の修理が被災状況を正確に把握した上で、必要な対策を講じた成果であることに疑う余地はありません。時代により修理の手法や考え方に違いはありますが、未永く建物を残していこうという意志にかわりはないのです。

熊野那智大社では土砂の撤去作業も完了し、いよいよ建物の本格的な修復に着手しました。一般の観光も問題なくできるようになった今、次の時代へとつなげる鼓動を感じに、那智山、そして世界遺産の熊野の地を訪れてみられてはいかがでしょうか。

(多井 忠嗣)



神社関係者の手作業による土砂撤去作業

和歌山文化財百景

遺跡で発見される地震痕跡

昨今、心痛となっている地震、避け難い自然の猛威ですが、人々を苦しめ日常生活に支障をきたす大災害をもたらせる時があります。昨年3月11日の東北地方太平洋沖地震では、大津波を発生させ甚大な被害（東北大震災）をもたらせ、各地に生々しい傷跡を残しています。和歌山でも、1946年（昭和21年）12月21日に発生した昭和南海地震を記憶に残す人も多いと思います。

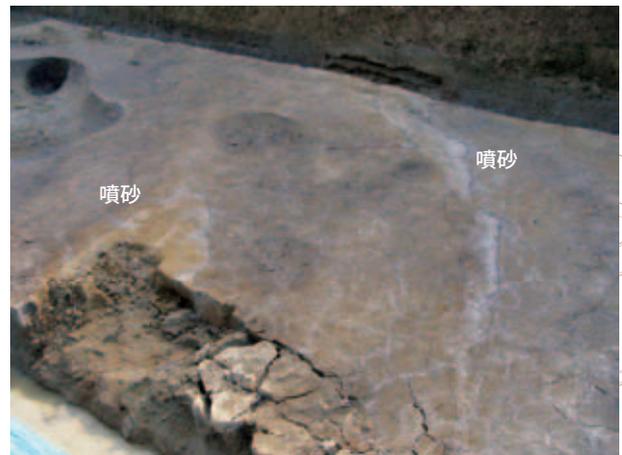
考古学上の遺跡調査においても様々な災害の痕跡を知ることが度々あります。平成18（2006）年度と同19（2007）年度の有田郡有田川町所在の藤並地区遺跡の調査において、地震による液状化現象によって生じた噴砂の跡を見つけることができました。噴砂は、鎌倉時代から室町時代にかけての水田耕作土に覆われることから、水田が耕作されていた直前の時代もしくはこれらの時代以前に生じた大地震により引き起こされた噴砂であることが明らかになっています。

文献史料の記録から、これらの噴砂は1361年（正平16年）に起こった南海大地震の可能性が高いものです。地震痕跡としての噴砂は、過去の遺跡調査では和歌山市川辺遺跡・太田黒田遺跡・井辺遺跡などでも数多く発見されています。あまり有難くない言葉ですが、地震国和歌山、東隣で1498年（明応7年）に起こった東海地震をも含めると、ここでは単純に140年前後もしくはその半分の期間の周期となり、遺跡調査において南海地震・東南海地震の予知にも役立っているところです。

この1月には、当文化財センター主催で、『自然災害と考古学—発掘調査から防災を考える—』と題して、公開シンポジウムを開催し、多くの方々に参加していただきました。災害への備えを知り、その被害を少しでも減らすことへの「減災」、また、自然災害の経験を風化させないことが重要だと、改めて考えさせられる一日でした。（土井 孝之）



2006年度に発見した噴砂（白線部分）



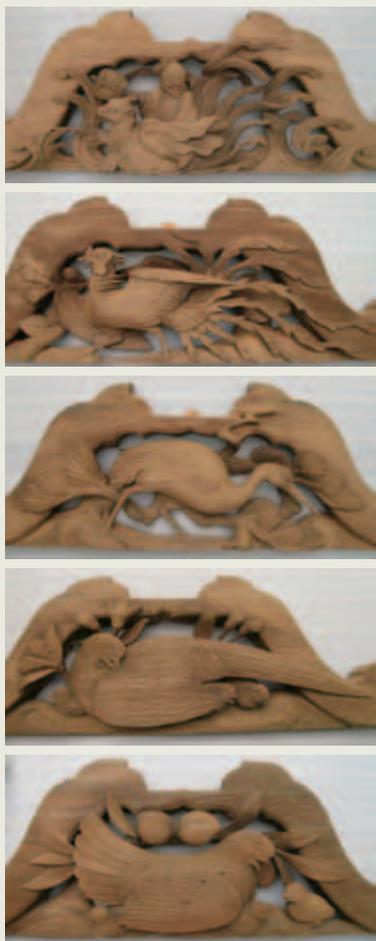
2007年度に発見した噴砂（並走する砂脈）

きのくに歴史小話

れきしこばなし

建築彫刻の話 ⑩

岩出市にある荒田神社本殿の墓股彫刻を紹介します。荒田神社は西坂本という集落の産土神で、本殿は寛永元年（一六二四）の建立です。天正十一年（一五八三）西坂本の大工堀内家に男の子が誕生しました。名は政信。やがて堀内家の仕事場であった根来寺が秀吉に攻められて没落し、職を失った堀内一家は故郷を離れ、京都、和歌山、茨城、日光と仕事を求めて各地を巡り、寛永元年には江戸に逗留していました。政信は故郷への思いを忘れたことはなかったでしょう。荒田神社の再建に当たって、江戸から自作の狛犬を寄進しました。そして今回紹介する墓股も政信が彫刻して送ったものと推定します。その彫刻の生き生きとした様子、鑿の切れの鋭さは尋常な技量ではありません。亀に乗る仙人のふくよかな笑顔、ひな鳥を慈しむ雉や鶏。戦乱の世を生き抜き、ようやく兆しの見えた太平の世を心から寿いでいる図像とは思えません。八年後、堀内政信は江戸幕府の作事方大棟梁に就任します。全国の大工職の頂点に立ったのです。私が最も尊敬する、紀州の生んだ偉大な大工の作品がここにあります。（鳴海 祥博）



発掘屋余話 ⑩

漆（うるし）

輪島塗あるいは春慶塗といった漆器製品がいまでも数多く作られ人氣を博していますが、日本人と漆の関係はずいぶん古いですね。

発掘調査でこれまで見つかった漆製品の中で最も古いものは、函館市の垣ノ島B遺跡で見つかったもので、縄文時代の早期、約九千年も前のものと言われています。同じ縄文時代でも晩期に帰属する青森の亀ヶ岡遺跡からは漆で彩られた櫛が何点か出土していますが、これはもう美術工芸品の域に達した見事なものです。和歌山では昨年（平成22年）すさみ町の立野遺跡で弥生時代前期の弓が出土しましたが、これにも一部漆が施されていました。

ただ一般的に発掘調査で漆の製品が見つかることは珍しいですね。よほどの条件——水分を多く含んだ粘土質の土でパックされていない限り残るものではありません。幸いに筆者はこの稀な機会に一度だけ遭遇することができました。

もう四半世紀も昔、昭和60年の冬、根来寺で調査に当たっていた時のことです。半地下式倉庫とよんでいる遺構を掘り進めると一瞬チラツと朱いものが目に飛び込んできました。よもやと思いつつ慎重にその上の土を取り除いていくと漆塗りの椀・高杯が姿を見せはじめました。それもほぼ完全な形で。まぎれもない根来塗りです。しばらく寒さも忘れ、その朱に吸い込まれるように見入ったことをいまでも覚えています。

それにしても漆というのは不思議な塗料ですね。ペンキなどあらゆる塗料は空気が乾いていないとダメですが、唯一、漆だけは逆に空気中の湿度が高くないと固まりません。まさに高温多湿の日本に適した塗料と言えるでしょう。漆を英語でJapanというのもむべなるかなですね。

（村田 弘）

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報

県立紀伊風土記の丘 <http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>

○冬期企画展「金属の考古学～金・銀・銅・鉄で作られたもの～」

期 間：平成 24 年 3 月 20 日（火）～ 5 月 27 日（日）

内 容：弥生時代の銅鐸や古墳時代の鉄製品など、金・銀・銅・鉄で作られた金属資料を展示します。

和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「たたかう村」

期 間：平成 24 年 3 月 10 日（土）～ 4 月 22 日（日）

内 容：鎌倉時代～江戸時代におけるきのくにの村々は、隣村や領主、自然と闘っていました。実際に戦闘におよぶ場合もあれば、裁判などで争う場合もありました。この企画展では、古文書や絵図を中心にして、当時のたくましく自立したきのくにの村人の姿を紹介します。

○特別展：「災害と文化財―歴史を語る文化財の保全―」

期 間：平成 24 年 4 月 28 日（土）～ 6 月 3 日（日）

内 容：今回の特別展では、昨年の台風 12 号によって被災した文化財のレスキューの様子を紹介するとともに、残された記録から過去に経験した災害を知ることによって、近未来に起こりうるであろうといわれている東南海・南海地震などの災害に対して、我々はどのようにすれば、地域の財産（文化財）を守れるのか、みなさんと考えていきます。

和歌山市立博物館 <http://www.wakayama-city-museum.com/>

○特別陳列：「新収蔵品展―博物館のたからもの」

期 間：平成 24 年 4 月 21 日（土）～ 6 月 3 日（日）

内 容：本館では、和歌山の歴史に関する様々な分野の資料を集めてきましたが、この特別陳列では、平成 16 年以降に収集した資料を五つの分野に分けて紹介します。

8
催し物案内

「発掘屋余話」

「建築彫刻の話」

7
きのくに歴史小話

「和歌山文化財百景」

6
連載コラム 文化財の散歩道

5
文化財建造物課 短信

2
「根来寺遺跡の発掘調査」

1
特集

根来寺遺跡

目次

（公財）和歌山県文化財センター現場事務所等一覧

【埋蔵文化財課分室】

◎和歌山市新在家 61 番地-4

TEL 073-472-3710

◎和歌山市土佐町 2 丁目 58-3

TEL 073-427-6174

【文化財建造物修理事務所】

◎金剛三昧院保存修理事務所

伊都郡高野町高野山 425

TEL 0736-56-5578

◎長保寺保存修理事務所

海南市下津町上 685

TEL 073-492-3260

風車 58 (2012 春号)

平成 24 年 3 月 30 日発行

（公財）和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843

FAX 073-425-4595

Email maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>